

原電側の説明は 非科学的である

記者会見記事を読んで

後藤武男

したいと思つてゐる。

一

原電力発電会社の一本松副社長は、十五日にわざわざ来水してくれて、英国のコーターホール改良型発電機の導入問題について記者会見を行つた。私は十六日「いはらき」紙上でくわしく報告することができた。その報告によると一本松さんは「安全性については「絶対自信がある」と述べた。しかし去る七月三十一日の原子力委員会の公聴会では、学術会議から選ばれた学者から安全性について、多くの疑問が投げかけられていた。地元民としての私は、果して、原電幹部の方々のいふ分をそのままのままで、安心してよいのかどうか大いなる疑念をもち一本松さんの説明では、足りない気がする。しつと私の私でさえも電のいふ分は、また、非科学的である、考えさせられる。私は二十一日の学術会議の討論会をみて、疑念を實の道徳の建設がはじまつており、さ

に倉庫用地などの買収も進められてゐる。これも認可前にすでに買収を済ませ、重ねようという下心である。これも月給をもらつてゐる人々としてはおもむを得ないのかもしれない。ただ私としては容易ならぬと思つてゐる。「コンテナ」は必要ない」と原電側はいふ切つてゐる。その理由としては、関東大震災の三倍の地震でも耐えられることをあげてゐる。

しかし黒鉛のつみ重ねであるこの原子炉の炉心が果してそれは耐震性があるかどうかは、また安全審査委員会でさえ審査中の問題である。ここに原電は、かつては、黒鉛を長く使つてゐると膨張することを予想して、この炉心に鋼鉄のたがをはめておき、耐震性を確保するといふ設計をしてゐた。ところが、最近では、この黒鉛が、逆にちぢまつてしまふといふ性質があることがわかつた。そうするとたがはきかなくなるので、新しく設計をし直してゐる。実際もしてゐないのに、本当にそれは耐震性があると考えてゐるのだろうか。この点は大きな問題である。またよくいわれる「関東大震災の何倍」といふのは、地震力が何倍に二倍に働いた場合のことであつて、この点にもことばの魔術がある。

また原電のコンテナといふものに對する考案が間違つてゐる。大体原子炉といふものは人里離れたところを置いておけば、たとへば事故が起つても大した被害はない。しかしできては使ひやすいといふことより、人間の住むところに近く、に置きたいから、速く置くか、コンテナといふ入れ物に入れようといふのだ。だからコンテナといふのは、周囲に住む人間を守るためであるものなのに、原電はいろいろの「安全装置」をつけるからコンテナはいらないといふ。しかし安全装置といふのは、いろいろの原因でそれそれだつてこれを抑えるといふものだ。一方、事故といふものは、予測のできることばかりでなく、普通では考えられないようなことが不幸にも重なり合つて起るものである。これは、国鉄不町事件のやうな例でもわかる。そういう場合には安全装置があつても事故は起る。ところが、コンテナといふものは、そういう事態が起つても、一番民衆に被害を受ける死の灰が放散されるのを、少しでも少くするものなのである。安全装置は機械を守り、ひいては公衆を守るのだが、コンテナの破壊による放射能放散を考へてゐる。その最大の事故として、ヨウ素、セシウムが二百五十キエリー放出されるといふ。だから原電側が一方向的にコンテナ

一は必要ないといひきるのは無稽である。しかし果してこれが考えられる最大の事故であるか。この原子炉には六億キエリーの死の灰がたまることになる。そのうちの取もつてヨウ素は、約数千万キエリーなのである。ところが原電は最大でもそのうちのたった二百五十キエリーしか放出されないと、数十分の一しかでないといふのだ。どうしてそういう計算になつたのか。それは英国の論文で二百五十キエリーの計算をしてゐるからである。ところが、この論文ではその十倍の場合も計算してある。それを原電は十倍も出るのは仮想的な事故であつてそんなことはあり得ないといふ切つてゐるのである。

ところが一方、原電が、原子力局に提出した許可申請書では、現に数千万キエリーが放出される場合の計算をしてゐる。記者会見での説明は「安全である」ことをさすといふ作意に満ちた説明の仕方といつても可い。ないであらう。

原電は補償として六十億円の保償金によつて十分まかなふのだらうといふ。だが米國を例にとれば、原子力保険は三億三億円となつており、さらに国家は、事故一件当たり最大千八百萬圓まで補償することになつてゐる。人口密度が日本にくらべて倍々進みに少ない米國で、しかも特に人口の少ないところを選んで置かれてあり、さら

に「既成事実」をさきに作つてしまつてむりやりにことを運んでおり、その考へ方が、この點にはつきりあらわれてゐる。正式の許可の下りないうちに契約を結んでしまひ、あとから問題が起つた場合は「英国との国際的な約束が破られた」といふので、国際信義を犯すことになる」といふ既成事実にしてしまつてゐるわけだ。すべての人の納得を得てこれを運ばねばならないことをかういふやり方で進めることは、余り感心できないことである。現に原研の正門向きには、原電予定地へ向けての道路の建設がはじまつており、さ

また原電のコンテナといふものに對する考案が間違つてゐる。大体原子炉といふものは人里離れたところを置いておけば、たとへば事故が起つても大した被害はない。しかしできては使ひやすいといふことより、人間の住むところに近く、に置きたいから、速く置くか、コンテナといふ入れ物に入れようといふのだ。だからコンテナといふのは、周囲に住む人間を守るためであるものなのに、原電はいろいろの「安全装置」をつけるからコンテナはいらないといふ。しかし安全装置といふのは、いろいろの原因でそれそれだつてこれを抑えるといふものだ。一方、事故といふものは、予測のできることばかりでなく、普通では考えられないようなことが不幸にも重なり合つて起るものである。これは、国鉄不町事件のやうな例でもわかる。そういう場合には安全装置があつても事故は起る。ところが、コンテナといふものは、そういう事態が起つても、一番民衆に被害を受ける死の灰が放散されるのを、少しでも少くするものなのである。安全装置は機械を守り、ひいては公衆を守るのだが、コンテナの破壊による放射能放散を考へてゐる。その最大の事故として、ヨウ素、セシウムが二百五十キエリー放出されるといふ。だから原電側が一方向的にコンテナ

一は必要ないといひきるのは無稽である。しかし果してこれが考えられる最大の事故であるか。この原子炉には六億キエリーの死の灰がたまることになる。そのうちの取もつてヨウ素は、約数千万キエリーなのである。ところが原電は最大でもそのうちのたった二百五十キエリーしか放出されないと、数十分の一しかでないといふのだ。どうしてそういう計算になつたのか。それは英国の論文で二百五十キエリーの計算をしてゐるからである。ところが、この論文ではその十倍の場合も計算してある。それを原電は十倍も出るのは仮想的な事故であつてそんなことはあり得ないといふ切つてゐるのである。

ところが一方、原電が、原子力局に提出した許可申請書では、現に数千万キエリーが放出される場合の計算をしてゐる。記者会見での説明は「安全である」ことをさすといふ作意に満ちた説明の仕方といつても可い。ないであらう。

原電は補償として六十億円の保償金によつて十分まかなふのだらうといふ。だが米國を例にとれば、原子力保険は三億三億円となつており、さらに国家は、事故一件当たり最大千八百萬圓まで補償することになつてゐる。人口密度が日本にくらべて倍々進みに少ない米國で、しかも特に人口の少ないところを選んで置かれてあり、さら

人口密度が日本にくらべて倍々進みに少ない米國で、しかも特に人口の少ないところを選んで置かれてあり、さら

人口密度が日本にくらべて倍々進みに少ない米國で、しかも特に人口の少ないところを選んで置かれてあり、さら

二

原電は補償として六十億円の保償金によつて十分まかなふのだらうといふ。だが米國を例にとれば、原子力保険は三億三億円となつており、さらに国家は、事故一件当たり最大千八百萬圓まで補償することになつてゐる。人口密度が日本にくらべて倍々進みに少ない米國で、しかも特に人口の少ないところを選んで置かれてあり、さら